

# アダム・スミスの道徳哲学とレトリック (下の1) On Adam Smith's Moral Philosophy and Rhetoric (3)

平野 英一  
Eiichi HIRANO

はじめに 問題へのアプローチ

第 1 章 スミスの『修辞学・文学講義』と道徳哲学との関わりをめぐって

1. 『修辞学・文学講義』の概要
2. 『修辞学・文学講義』についてのこれまでの論考について

第 2 章 スミスの思想体系における『修辞学・文学講義』と道徳哲学との関係をめぐって

1. ブラウンによるスミスのテキスト解釈
2. 公平無私な観察者と良心のストア的モデル
3. スミスの徳の体系のストア的ヒエラルキー

<以上 (上) 第6集、2002年3月>

第 3 章 『道徳感情論』のレトリック

1. 『道徳感情論』にみられるレトリックの諸要素
2. 批評家と劇場

<以上 (中) 第8集、2004年3月>

第 4 章 理性と想像力—— アートとしての哲学 (=科学)

1. 理論的探求—ワンダー (驚異) と想像力
2. 天文学理論体系の歴史的展開
3. スミスの科学的探究論をめぐって
4. 科学的探求—模倣芸術—言語の関係

<以上 (下の1)、2006年3月>

## 第 4 章 理性と想像力—— アートとしての哲学=科学

前章では、『道徳感情論』のなかでスミスが、道徳をどのように考え、どのように理論的に言説化するか、ということに関して、いかにレトリック的諸要素を本質的な構成要素として重要視し、全体的構成から個々の記述にいたるまで、そうした気配りをほどこしているかを考察してきた。そしてスミスのこうした考え方の根底には、合理主義的理性観に対するスミスの懐疑主義的哲学的立場、なかならずくヒュームの懐疑主義に密接した立場からの世界に対する人間の理性的把握の制約、および理性に代わる想像力にもとづいた合理性探求という人間の理論的営為への考え方があることをグリスウォルトが示唆していること

に注目してきた。いうまでもなく、スミスの道徳哲学のレトリック的構想に懐疑主義ともいえる哲学的姿勢が潜んでいるというようなテーゼは従来のスミス理解、とりわけ通俗的な理解からは受け入れ難いような問題提起であろう。なぜなら、一般的、あるいは通俗的理解においてスミスといえば、「見えざる手」という彼の有名なあの隠喩が一般的に広く人口に膾炙されているように、彼は世界に神の配慮と慈恵ともいえる見えざる手の働き＝世界の予定調和的メカニズムのあることを、経済領域において、また道徳領域において理論的に論証しようとした思想家としてうけとめられてきたからである。その意味でスミスは近代初期の自然法や自然科学におけるような理神論的機械論的世界観を継承し、自然におけるニュートンの法則に類似するような法則性を社会領域に見出そうとした実在論的経験論者として広く受けとめられているからである。スミスの専門的研究においてさえも、主著である『道徳感情論』や『諸国民の富』のなかに見出される彼の認識論的な文言から、そして何よりも最も彼の認識論的な見解が多く表明されている初期の遺稿集である（彼の遺言による未完成原稿の焼却から辛うじて免れた）『哲学論文集』（『哲学的主題に関する論文集』を以下このように略称する）<sup>(2)</sup>の文言から、彼のそうした理神論（自然宗教）的な認識論の性格、彼の科学観、そして彼のニュートンの科学的方法論、等々について言及され論議されてきたのであった。<sup>(1)</sup> そうしたなかでスミスの理論化の根底には非実在論的な、理性に対する懐疑主義が潜んでいるのではないかという問題提起は少数の論者によって主張されてはきたものの、その問題の追求は深めてられてこなかった。それゆえわれわれは本章において、この問題に関して、これまでの『哲学論文集』をめぐる論考を顧みながら、スミスにおける理性と懐疑論という問題にさらに立ち入って、道徳哲学とレトリックとのつながりを考察していかなければならないであろう。

## 1. 理論的探求—ワンダー（驚異）と想像力

スミスの遺稿である『哲学論文集』は、彼の死の直前にスミスより遺稿の処理を委ねられた友人ブラックとハットンによって1795年に出版された。そこに収められている論文はそれぞれ、次のようなタイトルがつけられていた。

「哲学的研究を導き指導する諸原理—天文学の歴史によって例証される—」（以下「天文学史」と略称）

「哲学的研究を導き指導する諸原理—古代物理学の歴史によって例証される—」（以下「古代物理学史」と略称）

「哲学的研究を導き指導する諸原理—古代論理学と古代形而上学によって例証される—」（以下「古代論理学・形而上学論」と略称）

「いわゆる模倣芸術において行われる模倣の本性について」（以下「模倣芸術論」と略称）

「音楽、舞踏および詩の間の親近性について」（以下「音楽・舞踏・詩論」と略称）

「ある種のイギリスの詩形とイタリアの詩形との親近性について」（以下「詩形論」と略称）

「外部感覚について」（以下「外部感覚論」と略称）

以上の諸論文の執筆時期については不明な点が多く、スミス研究者の間でも確定してはいないが、「外部感覚論」はかなり初期に属し、他の論文も若き頃のエディンバラでの講義

に深い関連があるものとして推定されている。(3) これらの論文で注目されるのは、初めの三論文、すなわち「天文学史」、「古代物理学史」、「古代論理学・形而上学論」の三篇がそれらに付された副題にも示唆されているように、「哲学研究を導き指導する諸原理」という大きな主題についての構想の下でその例証を示すものとして執筆されていることである。それらはスミスがエディンバラ時代に修辞学や法学とともにおこなったとされる哲学史の講義の基本的視点と素材を示していると思われる。しかしさらに、スミスが晩年にラ・ロシュフコーあての書簡（1785年11月1日付）において、彼が「取り組んでいる大きな仕事」として「一つは、文学のさまざまな部門のすべてと、哲学、詩および雄弁との一種の哲学的歴史です。もう一つは法と統治の一種の理論と歴史です」と書いていたことも顧慮すれば、それらの論文は、『哲学論文集』に収められているその他の「模倣芸術論」、「外部感覚論」、また『文学・修辞学講義』のレトリック論や『言語形成論』などともに、彼が終生思い描いていたが果たされずに終わったあの「哲学的歴史」という構想の下に包摂されるように意図された諸論考の初期ヴァージョンともみれるのである。

それらの論文のなかでも特に「天文学史」がこれまでとりわけスミス研究者によって注目され、中心的に論考されてきたのだが、それはその論考の冒頭で、スミスが「哲学的研究を導き指導する諸原理」をもっとも詳細に論じているからである。そこでまずそこに記述されているその「諸原理」の輪郭からみていこう。(4)

#### (1) 驚異・驚愕・驚嘆

スミスは、出来事のさまざまな生起に接したときに引き起こされる人間の感情、およびその情動的反応と認知的対応（探求心）を、驚異（wonder）、驚愕（surprise）、驚嘆（admiration）のはたらきから説き起こす。それらの感情的反応の違いは、スミスによれば、「新規で珍しいことは・・驚異と呼ばれる感情を喚起する。意外なことが驚愕を、壮大なこと、または美しいことが驚嘆を喚起する」のである。かれはそれらの違いをさらに詳しくこう説明している。「われわれが驚異するのは、異常で、普通でないすべての対象、かなりまれなすべての自然の出来事、流星、彗星、食、珍しい動植物であり、要するに、これまでわれわれがほとんどあるいはまったく知らなかった、あらゆる事物である。しかもこれから見るべきことについて、あらかじめ注意していても、なお驚異するのである。われわれは、たびたび見たことがある諸事物であっても、それらに会うとはほとんど予期しなかった場所に出くわすと驚愕する。・・われわれは、平原の美しさや山の壮大さに驚嘆する。それらを以前にたびたび見たことがあるにもかかわらず、そしてそのいずれにもわれわれが確実に見ると予期していたもの以外は何もないように見えるにもかかわらず、われわれは驚嘆するのである。」(5)

スミスよれば、こうした驚異、驚愕、驚嘆といった人間のそれぞれ異なる情動的反応の起こりは、対象に対する人間精神の表象的、ないし観念的対応のあり様によるのである。例えば驚愕の場合は、「どんな種類の対象でも、それが、しばらく前から予期され予知されていて現れる時には、それがほんらい喚起して然るべきどんな情動であろうとも、精神はあらかじめそれに対する準備をし、ある程度までそれを思い描きさえするに違いない。なぜなら、その対象の観念は、精神にずっと前から現れているので、対象自身が喚起するであろうのと同じ情動を、あらかじめ喚起するにそういないからである。」(6) こうして、意外なものとの出会いによって襲われた驚愕に伴う歓喜、悲嘆などの情動の強さを減じるもの

は慣習と習慣である。しかしスミスがこれらの情動において最も重視するのは「驚異」という感情の働きである。スミスによればこの「驚異」という感情とそこから生ずる精神的不安定こそが人間に理論的な好奇心と想像力を呼び起こし、理論的探求へと向わせ、哲学(=科学)的理論化にまで導くものであるからである。

## (2) 驚異と想像力

スミスは、人間の精神は「異なる諸対象間に発見されうる類似を観察するのを好み」、「すべての観念を配列し、組織化して、正しい種類と種目にそれらを収めようと努める」という。(7) こうした根源的性向が一般的名称と類と種に細分化していく分類化を産み出して、そうしてそのような分類に「帰属させることができれば、われわれは、それをよく知り、その本性をより完全に洞察したことを示したと空想しがちである。」スミスは人間精神にとって類似の発見と分類化は快であり、知解性の初発でもあるということから出発する。

「しかし、なにかまったく新規な珍しいものが現れると、われわれは、こういうことができないのを感じる。」(8)

まず、現象の特異性に対して想像力が滑らかにその現象に適切な観念と分類化をほどこせない場合、人間精神は不確実で不安定な感情に襲われる。この状態がスミスによって「驚異」といわれるものである。しかし「驚異」は現象の特異性によってだけでなく、さらに、見慣れた対象でもその時間的継起の特異性によっても引き起こされる。つまり、ある対象が「いつも続くのとは異なる対象のあとに現れると、それはまず、その意外性によって、「驚愕」を喚起し、「次にこの継起の特異性、または、出現の順序の特異性によって、驚異」の感情を喚起する。(9) スミスはこの「驚異」の出現を、後で論じるが、D.ヒュームからあきらかに借用していると思われる想像力の習慣的移行にもとづく「観念連合」の考えでもって次のように説明している。(10)

「二つの対象がいくら似ていなくても、互いに連続するのがたびたび観察され、絶えずその順序で感官に現われる時には、それらは空想の中で結合されるようになり、一方の観念は、他方の観念をひとりでによびおこし、導き入れるように思われる。」

「もし、それらの対象が、以前と同様、互いに連続するのがなおも観察されるならば、この連関、すなわち観念連合と呼ばれてきたものは、ますます緊密になり、一方の概念から他方のそれへと想像力が移行する慣習が、ますます強固に確定的なものになる。」

そうなる「その観念の方が外的対象より速く動くので、想像力は、絶えずそれらの前を走り、したがって事物の通常の経路にしたがって生ずるすべての事象が起こる前に、それを予知する。」

「想像力の諸観念がこうして動き慣れてきたのと同じ系列で、そして、感官に現れる諸事象の鎖によって導かれなくとも、諸観念がひとりで進行していく傾向を獲得したその系列で、諸対象が継起する時には、それらの対象は、すべて互いに密接に結合しているように見え、思考は努力も中断もなしに、それらに沿って滑らかに進む。」

つまり、「すべて現在の思考が、先行の思考によびおこされ、後続の思考をよびおこすように見えるのと同様に、対象自身が生じる場合にも、現在の事象はすべて同じようにして先行の事象に導かれ、後続の事象を導くように見える。」(11)

このように、諸事物の異常な継起から生じる「驚異」とは、想像力の習慣的関連の中断、停止、ばらばらの諸対象に沿っては進めない想像力の困難、「それらの間の切れ目や隔たり

の感じ」であるということがあきらかにされ、そしてそのことがこのように観念連合の原理から解明されるのである。

### (3) 理論的探求

「驚異」から探求が生まれるのは、「へだたっている諸対象の間の思考の移行を、滑らかで自然で容易にするために、橋のようにそれらをとにかくも結合できそうなものを発見しようと努力する」からである。想像力は「動きなれているのと類似の系列で継起し、二つのばらばらな現象を連結する、目には見えないが、中間的諸事象の鎖を想定する」ことで滑らかな移行を回復しようとする。

スミスは科学的探求とその理論化を、18世紀の同時代人と同様にまだ「哲学」と総称しているが、「哲学は、自然の結合諸原理の科学である」という。「哲学は、これらすべてのばらばらな対象をいっしょにする見えない鎖を示すことによって、この不協和で支離滅裂な諸現象の混乱情態に、秩序を導入し、想像力のこの乱れをしずめ、そして、想像力が宇宙の大回転をながめる時には、それ自体で最も快適で想像力の本性にふさわしい、平穏と落ち着いた調子を取り戻させようと努力する。」それゆえ、スミスは、「哲学は、想像力に語りかける学芸（アーツ）の一つとみなされよう」<sup>(12)</sup>とさえ言い切るのである。

さて以上がスミスの「驚異」論の骨子であり、スミス自身の文章の引用をあえて多く使ってその内容を示した。それは、後に論じることになるわれわれの問題が、究極的には彼の言葉をどのように解釈するかにかかってくるからである。しかしそのまえに、以上のような哲学的（＝科学的）探求と理論的体系化の根元としての「驚異」についてなお少しスミスの見解から見ておくべき重要な論点がある。

### (4) 「驚異」と「哲学的探求」の社会的条件

スミスによれば、人類は原初からこのような理論的探求をよびおこす「驚異」の感情的反応を示してきたわけではない。人間が「驚異」できるようになるには一定の社会的条件が必要であった。その意味で「驚異」は人間の超歴史的で本有的な感情的性向というよりは歴史的社会的に形成されてきたものである。「人類は、法、秩序、安全が確立される前の社会の初期の時代には、自然の一見ばらばらな諸現象を統合している、諸事象の隠れた鎖を発見しようとする好奇心をあまりもたなかった。」自然の諸現象によって日夜、脅威と危険に曝されていた未開人は、自身の無力感からそれら自然現象の不規則性に威圧されて目を伏せ、それらの威力には恐れに近い畏敬をもって見るか、あるいはそれらが快や美をもたらすならば感謝をもって見るほかなかった。「自然現象のあるものが彼（未開人）にふきこむ畏敬と感謝は、それらが畏敬と感謝の適切な対象であること、したがって、そういう感情の表現を喜ぶ知的諸存在から出たものであることを、彼に確信させる。」<sup>(13)</sup> スミスはここに多神教や民間の迷信の起源を見る。彼らにはまさにその無力感によって自然現象のさまざまな不規則性を「自然の劇場」として探求し想像力を愉しませようとする強さもゆとりもなかったのである。法が秩序と安全を確立し、生計の不安が解消されてくることから享受する余暇ができ、強さや安全を意識するようになってくると自然現象に注意深くなり、不規則性に気づきだし、それらすべてを接続している鎖を知りたがるようになる。<sup>(14)</sup> こうしてスミスは、人類を、哲学、つまり自然の様々な現象を結合している隠された連関を解明しようとする科学の研究へ駆り立てる第一原理が、日常生活のことがらから解放された想像力によって起こる驚異であり、それ自身の快樂として追及される、とこのように

哲学の起源についてのべる。哲学的自然探求の起こりを、自然現象の不規則性を「自然の劇場」として探求して想像力を愉しませるようになったという表現で記述している。それはまさに古代ギリシャにおける形而上学的観照＝テオリアの語源的意味（劇場で演技を観る）にちなんで述べているとも考えられるが、すでにわれわれが『道徳感情論』の考察においてその使用に注目した「劇場」のメタファーがここでも使われていることは、哲学（＝科学的探究）をアートとしてみるスミスの視点と関連してくるようにも考えられ、意義深い言葉であろう。

#### （5）慣れ（習慣）と繊細な感受性

すでに見たように、スミスによれば、驚異の感情とそこから発する哲学（＝科学）的探究心は、想像力の日常的習慣による滑らかな、自然な推移が攪乱されることから生じる。人間の精神が、ある自然現象に対して日常的、習慣的な想像力の働きに依拠して慣れ親しんでいけば、その現象に対して驚異の感情をひき起こされ、探究心を抱くようになることは難しい。スミスはこんな喩えを引き合いに出している。「パンは世界が始まって以来人間の肉体の通常の滋養物であり、人間は非常に長いこと毎日、パンがそれとはすべての点で異なる実体である骨と肉に変化することを見てきたので、この変化が毎日生ずるのは中間的諸事象のどんな過程によるのかを、調べようとする好奇心を滅多にもたなかった。それは、なにかそういう過程を想定することがほとんどなしに、一方の対象から他方の対象への思考の移動が、慣習によってまったく円滑で容易になっているからである」と。(15) スミスはこのような喩えを持ち出して、驚異と探求が、一般大衆のそのときどきの知解性（知的満足）のレベルを超え出た、より洗練された繊細な感受性を持つ専門家によって推し進められることをのべている。「大半の人びとには、完璧にうまく調子があっていて調和しているように聞こえる音にも、音楽家の一層すぐれた耳は、最も正確な拍子と最も完全な一致の双方の不足を見出すように、その生涯を自然の結合諸原理の研究に費やしてきた科学者のもっと実地訓練された思考は、より不注意な観察者には非常に緊密に連結されているように見える二つの対象間に、しばしば隔たりを感じるだろう。」(16) 自然に対する不注意な観察者である一般大衆に対して、より繊細な専門的な感受性をもって探求に向い、驚異を鎮めようとする哲学者（科学者）は、しかしながら他方で、なじみ深い原理によって現象の説明を生み出さなければならない。したがって哲学者（科学者）が提示する理論的説明（体系）は、「想像力を落ち着かせ、自然の劇場を、さもなくばそう見えたはずであるよりも、まとまったものにし、したがってより壮麗な光景にする」(17) ことをめざさなければならない。（ちなみに「天文学史」の後に続く「古代物理学史」においては、この点は次のように記述されている。「異質でばらばらに見える諸現象のこの混乱について、精神がいたく概念に、秩序とまとまりを導入するためには、それらすべての性質、作用、継起法則を、精神が完全に知悉なじんでおり想像力が滑らかに容易に中断なく動いていけるような特定の事物の性質、作用、継起法則から演繹することが必要であった。」(18)）

ここで注目したいのは、自然の哲学的（＝科学的）探求が、スミスによって「劇場」のメタファーで語られ、あたかも自然の中で演じられる光景を前にして、一般観衆の粗漏な観賞に対して、専門的に訓練された繊細な感受性をもって一層深く観賞し、その隠された演技や筋の意味を示しだして「そう見えたはずよりも、まとまったものにし、したがってより壮麗な光景にする」ことで観衆に自然の演じる劇を一層興味深く解き明かし、観衆を

感嘆させる批評家の美学的批評の技（体系的理論化）であるかのように思い描がかれていることである。スミスが「哲学は想像力に語りかける技芸（アーツ）の一つ」という意味はこのようない意味合いを込めて理解されうるであろう。このように解釈することによって、『道徳感情論』での「人生の劇場」における観客と批評家の織り成す道徳の理論化の構成や、『模倣芸術論』での美的判断と批評論、さらにはヒュームの「趣味の基準について」<sup>(19)</sup>の論文などとの関連が、一層の緊密さをもって浮かび上がってきて、それらを包括し、関連づけているスミスの統一的な視野（「理論的哲学史」という若きスミスが企画していた大構想）が輪郭を現わしてくるように思われるのである。

こうしたスミスの視角は、『天文学史』第三節までの「諸原理」の記述を締めくくり、第四節の天文学（宇宙論）の歴史の記述の視点についての次のような記述にも表れている。「世界のこの西方諸地域で、学識と才能ある人々がつぎつぎに採用してきたすべての異なる自然の体系を吟味しよう。そして、それらの背理性、蓋然性、真理や実在との一致または不一致を顧慮することなく、・・・考察しよう。そしてそれらの各々が、想像力を落ち着かせ、自然の劇場を、さもなくばそう見えたはずであるよりも、まとまったものにし、したがってより壮麗な光景にするのに、どの程度適していたかを探求することで満足しよう。」<sup>(20)</sup>

## 2. 天文学理論体系の歴史的展開

スミスはこうして論文の第四節において、歴史上主要な四つの天文学理論体系、すなわち、同心球、および離心球の古典的体系とコペルニクスおよびニュートンの近代的体系を取り上げ、どのようにそれぞれの体系が、ニュートンの時代まで、どの程度に想像力を和らげるのに適していたか、しかしどのようにそれらは想像力の働きに適さなくなり次の体系にとって代わられていったのか、を示そうとした。スミスの記述の主旨は次のようなものである、それぞれの理論体系は、それが最初に提起された時には、想像力の要求を満足させたが、新しい諸問題が生じると修正の段階に入り込む。この修正の過程の結果、かなり複雑さが増し、ついには想像力にとって受け入れ難いものになる。このような事態がそれに代替する説明として新しい理論体系へと転換する。こうして新しく生まれた理論体系は、その前の体系がかかえていたのと同じ問題を説明することを意図したものであるが、それをもっと想像力の要求にかなったものとして説明する。スミスによるこうした理論体系の歴史的転換の記述を詳しく検討することはここではできないが、その議論の展開がどのようになされているか、それを概略しておこう。

スミスの説明によれば、最初の天文学者たちは、三種類の異なった対象、すなわち、太陽、月、恒星の運動を説明する必要に直面した。これは、彼によれば、固体天球の理論によって達成された。つまりそれぞれの固体天球には規則正しい円運動が付与された。スミスによれば、それは、円がその曲率がどこでも同一であるので最も単純で理解し易い曲線であることと、それらの運動が一様であり、一様な運動は不規則な運動よりも容易に想像力がついていけるという、二つの理由からであった。この最初の体系では、天空の凹面に恒星は散りばめられ、その固体の日週運動によって回転させられるという説明が与えられると、太陽と月の運動をも同じ種類の理論で説明されるのは当然であって、こうして天空

理論はそうでない場合よりもずっと齊一的なものとされるのである。太陽と月はそれぞれ独自の天球が与えられ、一方の天球は他方の天球の内側に置かれ、それぞれは硬い透明な物体の凹面に付着し、天球の回転によって地球の周りを運行させられる、と想定された。その後、五つの惑星の運動を説明するために追加的な天球が加えられたのであった。このような体系は、スミスによれば、現実ですすでにおこなわれている様々な運動と結果についての一つの首尾一貫した説明を提示することによって、想像力に訴え、また単純でなじみ深い過程によって、「天空のもっとも雄大で一見ばらばらな諸現象」を結びつけたのである。(21) しかし天空における新たな諸物体の運動が発見されてくると、その体系がすべての現象を説明するとは限らないということに気づき、惑星の相対的位置の変化を説明するものとして、体系を修正し、天空の数を追加するの必要に迫られた人々が出てきた。こうしてエウドクソスは天球の数を二十七に、カリッポスは三十四に、アリストテレスは五十六に、フラカストーロはついに七十二にまで殖やさざるおえないようになった。そしてスミスによれば「諸現象を一様でまとめたものとするために考案されたこの体系は、いまやそれらの諸現象自身と同じ位に入りこんだ複雑なものになってしまった」(22) のであった。

こうしてスミスは、想像力を満足させることができないほどに複雑になってしまった先行体系は、同じ複雑な諸現象の新しい、代替的な説明へ転換するという原理をもって、その後の天文学理論の諸体系の転変を示すのである。同心天球体系は、アポロニウスによって展開された離心天球と周転円の新しい体系へ、その体系もピッパルコスとプトレマイオスによってさらに修正されて洗練されたものの、遂には先行体系と同じ運命をたどってコペルニクスの体系にとって代わられる。この体系の目的も「自然の最も崇高な作品が、その最もつまらぬ産物にも現れている調和と均衡を、欠如しているようにはもはや見えなくなるような体系であった。」(23)

しかしこのコペルニクスの体系も、観察された諸事象を、ずっと少数の基本原理によって、一層完全に説明でき、それらの現象の未来の運動をうまく予言できたニュートンの体系によって取って代わられたのであった。この転換の理由をスミスは次のように言う。その体系の「諸部分は、他のどの哲学的仮説の諸部分よりも厳密に結合されている。彼の原理である引力の普遍性と、それが距離の兵法の増加に比例して減少することを認めれば、彼がそれによって結びつけるすべての現象は、必然的な帰結として導かれる。・・・またそれが採用している統一諸原理は、想像がついていくのになにも困難を感じるようなものではない。物質の引力は、その全性質のうちで慣性に次いでわれわれになじみぶかいものである。」(24)

こうしてスミスは、この「天文学史」をニュートン体系の当時における席卷と声望に対する次のような批評でもって締め括っているのであった。

「われわれはすべての体系を、そのままではばらばらで不調和な自然現象を結びつけるために想像力が考案したものに過ぎないと説明しようと努めてきたのであるが、そういうわれわれでさえ、知らず知らずのうちに、この体系の結合原理を表わす言葉を、あたかもその原理が、自然がその諸作用を結合させるために用いている真実の鎖であるかのように、使ってしまった。であるから、その体系が人類の全般的で完璧に認められざるをえなかったこと、そしてそれがいまや、天空の諸現象を想像力によって結びつける試みとして出なく、かって人類によってなされた最大の発見として、つまり、われわれがその現実性



を日々体験していると言う根本的事実によって、すべてが密接に結合されている、最も崇高な真理の巨大な鎖の発見とみなされざるを得なかったことを驚いたりできようか。」<sup>(25)</sup>

いま引用したスミスのこの微妙な意味をこめた言葉をどのように解釈するか、という問題こそ、スミスとニュートン主義の関係をめぐり、その後の研究者たちによる論考の中心軸になってきたともいえよう。そこで次にわれわれはその点を見ていこう。

### 3. スミスの科学的探究論をめぐって

これまで概観してきた「天文学史」に表明されたこのような科学理論についてのスミスの構想は、これまで『諸国民の富』での経済学的确立という彼に対する一般的評価のなかで、『諸国民の富』や、あるいは『道徳感情論』でのべられているさまざまな彼の理神論を思わせる文言やその方法論などと関連づけられてさまざまに論考されてきた。<sup>(26)</sup> そうして、すでにのべたように、それらの主要な視点や論点はなによりもかれの科学の構想、ないし科学的方法論の本質をニュートンにひきつけて解釈するものであった。またより専門的にはスミスのそうしたニュートン主義的な科学論の構想が経験科学の方法論としてどのように評価できるかといった観点からであった。<sup>(27)</sup> しかし近年においては、スミスの科学の構想を短絡的にニュートンの科学観と同一化する通俗的解釈に対して、かれの科学の構想の複雑さがさまざまに指摘され、影響史の点から言えば、「ニュートン主義的」科学観も歴史的には多様な理解形態を取って現象したのであり、一義的に同定することは不正確であり、<sup>(28)</sup> スミスの科学構想への理論的影響という点ではニュートンよりもむしろコンディヤックやダランベール、<sup>(29)</sup> あるいはビュフォンの博物誌の科学観との関連のほうが深い、<sup>(30)</sup> 等々さまざまにいわれるようになってきている。またスミスの科学論として現代的理解から解釈すれば、パラダイム変換との関連ではクーンの科学論が、<sup>(31)</sup> あるいは科学的探究と仮説理論との関連ではポパーの科学論との親近性<sup>(32)</sup> が言及されたりもしてきた。そして彼の想像力理論と懐疑主義との関連ではいうまでもなく、ヒュームとの関連で論考されてきた。<sup>(33)</sup> それらの解釈は、そのようにさまざま関連で論考しながらも中心的には、スミスは「天文学史」ではあのように科学理論を想像力に基づくアートとして捉える視点から科学の歴史的発展を解釈してはいるものの、彼は理神論的科学観に立って客観的真理の存在を認め、科学理論は漸進的にその真理を捉え表現していくものとして考えているのか、それとも彼はヒュームの影響のもとで科学をアートとして、想像力の考案するものとして人間の美学的判定に基づき是認される主観的合理性のみをもつものと考えていたのか、それならば彼の理神論的な言明とはどのように折り合うのか、という論点をめぐってきたといえよう。ここではそれらの多岐にわたる諸論考の中から、われわれの問題から見て考慮しておくべきと思われる論考として、实在論的科学観としてみるキャンベルと、それに対してコンベンションナリズムに立つ科学観としてみるリントグレンの論考<sup>(34)</sup> をとりあげて、スミスの科学構想の示す複雑な相貌をみていきたい。

#### (1) キャンベルの解釈

キャンベルは、『哲学論文集』においてスミスが、人びとに科学的探究を促し、可能にさせる心理学的欲求と社会的環境とを関連させながら科学の進歩のための科学的説明を与えようとする試みしているとみる。そしてキャンベルは、スミスがその彼の議論の展開におい

て科学的探究の本質に関する仮説-演繹的モデル (the hypothetico-deductive model) にきわめて近い科学解釈に到達していると主張する。K.ポパーの提唱したこの仮説-演繹モデル理論は、科学は観察される諸事象の間の結びつきに関する仮説的-一般化のテストをとおして進歩するという理論である。すなわち、ある命題が科学的であるのは、特定の観察可能な事象がそのもとで生じるであろう条件を記述する他の命題をそこから演繹することが可能な場合である、ということである。こうした観点からキャンベルは、スミスの科学的探究についての理解の中には仮説-演繹的モデルに近接した科学的説明としてどのような特徴をもっているかを指摘していく。(35) 彼が第一に指摘するのは、スミスが説明の親密性 (familiarity) 理論の興味深いヴァージョンを提示しているということである。説明の親密性理論とは、事象はそれがわれわれに親密なものとして類別される、もしくはそれに比較される時に説明されるというものである。キャンベルによれば、スミスにおけるこの親密性の理論は規則性 (regularity) 理論ないし包摂法則 (covering-law) 理論の心理学的形態であることを示している。包摂法則理論によれば、或る事象は、もしそれが一般法則の一つの事例であると示された場合に、説明されたのであるという。スミスはすでに見たように、人間の精神の基本的原理のうちに、或る観念から他の類似した観念へ (分類化) あるいは初めの観念に時空的に近接し、感官に頻繁に現れた観念へ移行する想像作用の性向をみている。この想像作用の性向は事物の継起順序の恒常的な反復によって強化され習慣的の反応となる。この観念連合は直接的未来に対する潜在的意識的な予見作用において想像作用を含んでいるといえる。観念の流れが止まり、精神がその正常な経過へと想像力を取り戻すために、説明を要求するのは、ある未知の対象が感覚に現前するためにそうした予期が続けられないか、あるいは事象が不慣れな順序で現われるので予知される事象が生起しない場合である。キャンベルは、スミスが科学的説明の本質に関する親密性理論を提示している場合、確かに科学的説明が真理の直接的表現であるとは主張しておらず、スミスの本来の意図は、なぜ人間の精神は科学的説明でもって満足するのかを明らかにすることにあつたことは認める。しかしキャンベルは、スミスの抱いた規則性の理論と親密性理論は相互に補い合うのであって、前者は科学的説明の論理的必要性を与え、後者はなぜ科学的説明が受け入れられるのかに関する心理学的理由を与えているのだという。(36)

さらにキャンベルは、スミスが分類と一般化の日常的活動を科学的思考の第一ステップとして、科学的説明と常識的説明の連続性を正当に評価したこと、およびそれに関連して、科学の本質的レベルにおける帰納的手続きの持つ地位を正しく捉えていることにも注目する。日常的におこなわれる観念連合は過去において、もし事象 b が事象 a の後に続いたのならば、将来においてもそうであろうと信じさせ、事象 a は恒常的に事象 b によって後続されると結論づける傾向にあることを説明する。つまり観念連合の心理的過程は論理的に言えば帰納的手続きである。しかしこの日常的な帰納的手続きは科学的説明としては不十分であり、より高次の一般化と法則化が求められる。キャンベルによれば、スミスは科学者が観察された事象の順序に、もしその順序それ自体は親密であるにしても他の観察された順序に似ていなければ同意しないことを指摘することで、科学がいかに単純な帰納的手続きの限界を乗り越えるかを示していると言う。そしてスミスはそのためには、科学者は観察された諸現象の関連づけを超えて、事象のまだ観察されていない現象についての仮説を提示しなければならないことを理解していると言う。スミスは科学における理論の重

要性、すなわち観察可能な諸事象の多様性が導き出せるような仮説モデルを示唆する完全な科学的説明の必要性を幾多の例で示しているとキャンベルは主張する。(37)

このようにキャンベルは、スミスは科学理論が想像作用に訴えるためにも持たなければならない諸要件を主張しただけでなく、科学理論はいくらこのような美的指標を満たしたにせよ、もしそれが観察された事実と合致しなければ、受け入れられなかったであろうことを暗示する科学的例証を数多く提示しているという。(38) こうしてキャンベルは、スミスの科学論における専門家（科学者）による客観的事象への注意深い観察の重要性を強調して、スミスはポパーと同様に、科学は体系的なテストによって慎重に統制された、想像的で大胆な推測ないしは予見であるとみている。つまりキャンベルによれば、スミスが展開した科学的説明の心理学的考察の背後には、科学による客観的真理の歴史的漸進的な認識可能性が想定されていると解釈するのである。

## (2) リントグレンの解釈

リントグレンは、従来のスミス研究において一般的であった解釈、すなわちスミスは機械論モデルを用いて世界を解釈しているとする見方に反論して、スミスは实在論的認識論的見解を持っていたのではなく、コンベンショナルな認識論を持っていたことを主張する。リントグレンによれば、これまでスミスの科学探求論が实在論的認識論に立つものとして解釈されてきたのは、スミスの探求論の中心的概念である驚異についての誤った解釈にもとづいているという。そうした誤解は一般に次のように解釈ないしは説明されるところにある。(39)

すなわち、それらの解釈にしたがえば、人はそれがもたらすどんなものに対しても情緒的に備えるために、将来を予想し、それによってある程度の平静さと落ち着きを保とうとする。もし或る対象が人の心構えのできてない情緒をひき起こした場合、それは驚異と驚愕をひきおこす。予期された対象のイメージを構成し、それによって対象がひき起こすと予期される情緒を喚起することで将来に備えて心構えする。対象の再構成と事象の連続的成り行きに自己を慣らすことによって、いかなる対象が生じる傾向にあるかを予想できる。この再構成と経緯、すなわち眺望とよべるようなものは、予期された対象のイメージを構成する上で想像を導く働きをする。しかるに或る対象が予期された文脈、秩序とは異なって現れる時、驚愕をひきおこすだけでなく自己の見通しへの疑惑をひき起こす。

このように驚異は人の眺望が将来に対して情緒的に心構えするには確かな基盤でないと気づくことから結果する不安や緊張の一タイプとして理解される。この不安や緊張はこれまでの眺望からでは収められないことを明らかにした元を説明するような眺望を作り直すことによって将来を見通し、驚愕を沈める人の能力への自身をよみがえらせるときにやわらげられる。この自信は探求のプロセスによって「自然がその展開を結びつけられるために使う实在の鎖」が認知されたときに回復する。この实在の鎖の性格について競合する主張は、包括性、一貫性、親密性によって評価される。このようにスミスが考えた探求の働きは、対象や事象の生起を支配する因果法則を多かれ少なかれ正確に対応すると信じられる規則をもった眺望を提供することによって将来を予想できるようにさせることである。

しかしリントグレンは、このような解釈は驚異の本性についての誤解であるとして以下のように解釈する。まず、スミスが理解しているところの観察とは認知ではなく、再収集である。すなわち類似している、あるいは時間的につねに結びついている二つの事象観察

する場合、観察するものは一方のものが他方のもののイメージを引き起こす、ないし呼び起こすということである。観察は眺望がすでに習慣などのコンベンショナルなものによって出来ていることを前提する。観察の手続きは眺望の構成要素ではなく、すでに確立されている眺望を適用するだけである。リントグレンによれば、スミスはつぎのようなコンベンショナルな認識論的立場に立っていたのである。すなわちわれわれのコンベンショナルな認識図式から独立に、事象と人びとを関連づけられるようなものは人間認識の射程内にはない。心の外部にあるものの秩序において事象を支配するような法則は人びとによって知られることは決してないし、その秩序を再現するといえるような仮説も検証できない。したがってリントグレンによれば、スミスがいう驚異が、新しい異様な対象によってひき起こされるのは、予見されていないからではなく、不慣れであるからである。そして、驚異が探求を呼び起こすのは、予想モデルの信頼性に対する疑惑というよりも、現象を秩序立て調和させる人間の能力への疑惑である。探求とは現象に秩序と調和を持ち込む努力であり、そのようにできるという人間の自己能力を確信させる様なしかたでなされる努力である。このような人間の独立心と自己確信とが、余暇と市民的統治の確立において文明化された人びとを、臆病で迷信深い先入観から隔てる。科学はなみはずれた明証性をもって人びとの創造的な才能を表わす。(40) こうしてリントグレンは、スミスの考える探求の本性を、「自然の結合法則の科学」であるということよりも、「想像力に語りかける技芸の一つである」というかれの文言に力点をおいて解釈するのである。そしてスミスにあっては、この技芸として科学的探究は模倣芸術とともに、言語をプロトタイプとしてみなされる共通の本質において考えられているという。(41) そこで次にスミスの「模倣芸術論」と「言語形成論」の論考とのつながりについてさらに考察していこう。

#### 4. 科学的探求—模倣芸術—言語の連関

すでに示したように『哲学論文集』に収められている「模倣芸術論」において、スミスは絵画、彫刻、音楽（声楽、オペラ、器楽）、舞踊、詩などのさまざまな芸術とそれぞれが創り出す美的価値を、模倣という中心的観点から説明している。(42) こうした模倣芸術へのスミスの初期からの関心は、いうまでもなく17～18世紀にかけてのフランスフランスを中心にしたデュボス、ダランベール、ディドロ、ルソーなどによる模倣芸術論議の高揚への彼の高い関心に他ならない。(43) (なかでもルソーの音楽論は「模倣芸術論」において直接引き合いにだされている。)(44) スミスはこの論考において、まず絵画と彫刻との比較を主にして、それらが示しだす模倣のさまざまな相面や度合いからそれらのもたらす美的感情を分析して、次のように結論づける。すなわち、単なる複写やただ正確無比なだけの模写は美を生み出さず、また絵画における模倣が彫刻における模倣よりも美的効果と快さをより多くもたらすのも、模倣の美しさの基礎は模倣したものと模倣される対象との間に不一致にあり、その不一致が大きいほどその溝を克服したことを示す技芸が驚嘆と称賛と快楽を呼び起こすからである、という。「この快楽はまったく、一種類の対照型の非常に異なった種類の対象を表現するのを見た際の驚愕に基づくのであり、さらに自然がそれらの間に確立した不一致をこれほど見事に克服する技術への、われわれの称賛に基づくのである。」(45)

リントグレンはここに、科学的探究と模倣芸術とをつなげているスミスの洞察を見る。

スミスは科学的探究と模倣芸術とを関係づけて、こうのべている。「彫像と絵画の高尚な作品は、次の点で自然の驚くべき現象とは異なる、一種の驚嘆すべき現象であるように、われわれには見える。すなわち、いわば、それら自身が自らについての説明を伴っていて、それらが作り出されるやり方と方法を、目に対してさえ、明らかにするという点においてである。」絵画や彫像においてどのような技法によって大きな真実さや生々しさをもって対称が表現されたかを視覚的に理解できることによって、「われわれはその効果に驚嘆し、眼を見張る。そしてわれわれは自ら楽しみ、その驚嘆すべき効果がどんな風にもたらされるかを、自分がある程度理解できることを知って満足する。」<sup>(46)</sup> 科学的（＝哲学的）探求の対象である自然は観察者にどのように驚嘆すべき結果が生み出されたのかを明らかにしない。したがって科学的な探求が「自然の劇場を、さもなくばそう見えたはずであるよりも、まとまったものにし、したがってより壮麗な光景にする」<sup>(47)</sup> よう、われわれの眺望を改善することを目的とするのである。リントグレンによれば、絵画が見物者に想像による同感を通じて対象のイメージを示し、芸術家はその絵を描くときに感じたものと同種の感情であるとみなす感覚をひきおこすように、科学的探究も観察者に同感のはたらきによってまったく異なる対象の経験をさせるイメージに対応する対象の観念が作られるような構成の規則を作り上げるのであり、スミスはしたがって模倣芸術の一種とみなしていると解釈する。<sup>(48)</sup> そして彼はさらにスミスが言語をこれらのプロトタイプとしてみなしていたことを、スミスの言語形成に関する論考に関連づけて考察する。

スミスの言語形成に関する考察は、すでに第1章で言及したように、『修辞学・文学講義』において提示されたが、その後さらにくわしく展開された見解が「諸言語の最初の形成に関する諸考察」という題名で1767年の『道徳感情論』の第三版に付録として付け加えられて以来、スミスによってその後の改版においてもそのかたちを終生保たれたままにされていた。<sup>(49)</sup> リントグレンによれば、スミスの見解では、言語は、絵画が観察者に色彩の二次元的集合とは異なる対象のイメージを示すように言語の発声は音の複合体とは異なる対象のイメージを示す出すという意味で模倣芸術の一種といえるだけでなく、すべての模倣芸術がコンベンショナルなサイン体系のかたちでなされるとすれば、言語がそのプロトタイプとしてみなされている。スミスは、言語が他の模倣芸術と同様にある対象、すなわち記号をして別の特定の対象を代理表現させる行為によって始められたとみている。この指示作用は、表示された対象は話し手の関心に応じてあらゆる対象の中から選び出されること、サインとして選ばれた対象は言語共同体の類比の愛好と音の特定の規則と指標に基づいて選び出されること、記号はその対象のイメージを直接的に示すことによって、模倣された対象を間接的に表示し、そうした表示がその共同体の中で受け入れられるならば、その記号は聞き手の心の中にそれ固有に対応する対象のイメージを呼び起こす、などを重要な特徴としている。それらはすべて観念連合の多様な仕方である。スミスが言語の形成の次の段階と見ている一般名詞の形成はサインとサインされるものとのこの関係をつぎのように深化させる。つまり記号の場合には、サイン、それが呼び起こすイメージ、それが指示する対象はいずれも単一体であるが、一般名詞の導入によって、サインと呼び起こされるイメージは複合体に変わり、他方サインされた対象は単一性を保持し続けるのである。一般名詞はそれだけでは不確定にしかに表示できないので、その導入は必然的にすべての発言が複合的になっていく。<sup>(50)</sup> スミスはそこからこうしたことを補うために、一

方には実態、質、関係、などをしめす形容名詞や、形容詞、前置詞などの形成、他方にそれに先行したであろう名詞の格変化の形成などへ考察を展開しているが、リントグレンは、こうしたスミスの考察の展開から次のような点を主張する。こうして複合的な統一体にされていく言語を取りまとめていく文法規則は、聞き手が表示された対象のイメージをそれにしたがって構成する意味論的定式を作成するが、それらはどちらも言語共同体で評価される指標としての包括性、一貫性、親密性、および感性的（美的）選好を反映している。われわれの観念の構造はこうした言語の本性から生じているのであるから、その意味論的定式にはそれが代理表現する客観的状态の構造との照応テストはありえないのである。スミスの科学的探究の考えが究極的に位置づけられねばならないのはこうした言語をパラダイムとするサイン体系でなければならない。科学的探求は、観察者が彼の共同体の中でその時々を受け入れられている照応の意味論的規則に照応させて事象を別のイメージに連合させる意味論的定式化にギャップが生じた場合、その定式を修正してそのギャップを橋渡しする試みともいえるのである。(51)

さてこれまで、スミスの科学的探究の構想に関して、相反する解釈の可能性を見てきた。キャンベルのようにスミスの科学的探究論をポパー的仮説演繹理論の心理学的表現形態として捉えて、その背後には理論の客観的真理の補捉と検証可能性を秘めているという解釈の可能性も否定しきれない含みがあり、したがってスミスは懐疑論者であるという主張は成り立たないともいえるかもしれない。しかしながら、これまで見てきたようにスミスが科学的探究論において科学の理論形成をなによりもその理論がもたらす知解性、説得性において、つまりレトリカルな真理性のところに焦点を当てていることは明確であり、客観主義的真理を映し出す理神論的、合理主義的理性観に立脚したような理論形成を考えてもいなかった、あるいはそうした構想に強く懐疑的であったということは主張できるであろう。そうしてむしろこれまで検討してきた『道徳感情論』や『哲学論文集』の諸論考でのスミスの言明を統一的に関連付けて考察してみるならば、リントグレンの解釈のように、科学を模倣芸芸と関連づけ、言語、芸術、科学的探究とその理論化を人間の生み出す創造的芸芸として統一的に考えようとしていたと考える方が自然であり、またなぜスミスがそれらの主題に強い関心を持ち、それらに関する論考をまとめた「哲学的歴史」として構想したかも了解できるであろう。そしてわれわれの主題であるスミスの道徳哲学とレトリックの関係の問題を、さらにD.ヒュームの関連で、しかもかれの観念連合論や懐疑論との関連だけでなく、かれの芸術批評理論との関連で、考察してみることも意味も浮かび上がってくるであろう。

(続く)

## 注

- (1) スミスへのニュートンの及ぼした影響を論じた論考で、代表的なものとしては、H.J.Bittermann, 'Adam Smith's Empiricism and the Law of Nature', *Journal of Political Economy*, vol.48, Nos.4, 5, 1940. pp.487-520, 703-34. また近年では、N.S.Hetherington, 'Issac Newton's Influence on Adam Smith's Natural Law in Economics', *Journal of The History of Ideas*, 44,(3), 1983. がある。その他に、

スミスの科学論を論じたものとして著名なものに、J.F.Becker, Adam Smith's Theory of Social Science, *Southern Economic Journal*, vol.28 (1961), pp69-84. や H.F.Thompson, 'Adam Smith's Philosophy of Science', *Quarterly Journal of Economics*, vol.79(1965), pp.212-33. などがある。

- (2) Adam Smith, *Essays on Philosophical Subjects*, ed.W.P.D.Wightman and J.C.Bryce, 1980. (以下、E.P.Sと略称する) アダム・スミス『アダム・スミス哲学論文集』、篠原久・他訳、名古屋大学出版会(以下『哲学論文集』と略称する)
- (3) これらの執筆時期については、E.P.Sにおけるそれぞれの論考への編者のIntroductionを参照。諸論考への古典的諸思想の影響などについては、Gloria Vivenza, *Adam Smith and the Classics The Classical Heritage in Adam Smith's Thought*, 2001, Chapt.1が詳しい。
- (4) The History of Astronomy, *E.P.S.* (以下H.Aと略称する。)
- (5) *E.P.S.* (H.P.) p.33, 『哲学論文集』、6-7ページ。
- (6) *E.P.S.* (H.P.) p.34, 同上書、8ページ。
- (7) *E.P.S.* (H.P.) p.38, 同上書、14ページ。
- (8) *E.P.S.* (H.P.) p.39, 同上書、15-16ページ。
- (9) *E.P.S.* (H.P.) p.40, 同上書、18ページ。
- (10) 「天文学史」におけるD.ヒュームとの関係については、D.D.Raphael, '“The true old Humean Philosophy” and its Influence on Adam Smith', in *David Hume. Bicentenary Papers*, ed. G.P.Morice, 1977. PP.23-38. が詳しく論考している。この観念連合に関する記述がヒュームに関わっている箇所は、いうまでもなく彼の『人性論』第1巻、第4部、第二節「感覚機能に関する懐疑論について」での記述である。David Hume, *A Treatise of Human Nature*, ed. D.F.Norton and M. J.Norton, 2000, B. 1, Part.4, Sec.2. pp.121-144. 『人性論』、大槻春彦訳、岩波文庫、(二) 15-56ページ。
- (11) *E.P.S.* (H.P.) p.40-41, 『哲学論文集』、18-19ページ。
- (12) *E.P.S.* (H.P.) p.45-46, 同上書、25-26ページ。
- (13) *E.P.S.* (H.P.) p.48-49, 同上書、28-30ページ。
- (14) *E.P.S.* (H.P.) p.50, 同上書、31ページ。
- (15) *E.P.S.* (H.P.) p.45, 同上書、24ページ。
- (16) *E.P.S.* (H.P.) p.45, 同上書、25ページ。
- (17) *E.P.S.* (H.P.) p.46, 同上書、26ページ。
- (18) Adam Smith, *History of the Ancient Physics*, *E.P.S.* p.107, 同上書、123ページ。
- (19) David Hume, 'On the Standard of Taste', *Essays Moral, Political, and Literary*, ed. E.Miller, 1986「趣味の基準について」、浜下昌広訳、『現代思想』、1988年9月号、Vol. 16-11, 168-185 ページ。
- (20) *E.P.S.* (H.P.) p.46, 『哲学論集』、26ページ。
- (21) *E.P.S.* (H.P.) p.56, 同上書、38ページ。
- (22) *E.P.S.* (H.P.) p.59, 同上書、42ページ。

- (23) *E.P.S.* (H.P.) p.71, 同上書、57ページ。
- (24) *E.P.S.* (H.P.) p.104, 同上書、101ページ。
- (25) *E.P.S.* (H.P.) p.105, 同上書、103ページ。
- (26) 『道徳感情論』と『国富論』との関係を中心にスミスの科学観と宗教観、および自然神学のかかわりをめぐるこれまでの研究史の鳥瞰は、田中正司『アダム・スミスの倫理学』、御茶ノ水書店、上巻の「序章」、3-37ページでなされている。
- (27) 生越利昭「アダム・スミスにおける方法の問題」、『商大論集』,第28巻6号、1977年、48-72ページ。
- (28) 長尾伸一「アダム・スミスと『ニュートンの方法』」、『思想』、1987年7月、No.757、102-125ページ。同「アダム・スミスの方法論と十八世紀科学のコンテクスト」、『思想』、2002年10月、No.942、105-135ページ。
- (29) A.D.Megill, 'Theory and Experience in Adam Smith', *Journal of the History of Ideas*, 36(1), 1975. W.P.D.Wightman, 'Adam Smith and the History of Ideas', in A.S.Skinner and T.Wilson (eds), *Essays on Adam Smith*, 1975
- (30) 鈴木信雄『アダム・スミスの知識＝社会哲学』、名古屋大学出版会、1992年、第I部、25-120ページ。
- (31) A.S.Skinner, 'Adam Smith: Science and the Roll of Imagination', in W.B.Todd (ed), *Hume and the Enlightenment*, 1974. A.スキナー『アダム・スミスの社会科学体系』、田中敏弘・他訳、未来社、1981、第二章、20-54ページ。
- (32) T.D.Campbell, *Adam Smith's Science of Morals*, 1971.
- (33) 注(10)のRaphaelの論考参照
- (34) J.R.Lindgren, *The Social Philosophy of Adam Smith*, 1973.
- (35) Campbell, pp.32-33.
- (36) Ibid, pp.34-36.
- (37) Ibid, pp.37-38.
- (38) Ibid, pp.41-45.
- (39) Lindgren,pp.3-6.
- (40) Ibid, pp6-8.
- (41) Ibid, p.10.
- (42) 'Of the Nature of that Imitation which takes place in what are called The Imitative Arts', *E.S.P.* pp.176-213. (以後、O.I.A. と略称する) この論文を主題にしている論考は、Gerhard Streminger, 'Adam Smiths Theorie des asthetischen Urteils in Imitierenden Künsten', in *Der naturliche Lauf der Dinge*,1995. だけのようなのである。
- (43) この啓蒙期の美学的高揚については、E.Cassirer, *The Philosophy of the Enlightenment*, 1951, カッシーラー『啓蒙主義の哲学』、中野好之訳、ちくま学芸文庫、下巻、第七章が概観を与えてくれる。
- (44) *E.S.P.* (O.I.A.) p.199, 『哲学論文集』、186-187ページ。
- (45) *E.S.P.* (O.I.A.) p.185. 同上書、164-165ページ。
- (46) *E.S.P.* (O.I.A.) p.185. 同上書、165ページ。



- (47) *E.S.P* (H.P.) p.46. 同上書、26ページ。
- (48) Lindgren, pp.9-11.
- (49) ‘Considerations concerning the First Formation of Languages’ (以後、C.F.L.と略称する) 現在のスミスの全集グラスゴー版では、この論文は、*The Theory of Moral Sentiments* (『道徳感情論』) 中ではなく、*Lectures on Rhetoric and Belles Lettres* (以後、L.R.B.L.と略称する。『修辞学文学講義』) 中に収められている。これではスミスがこの論考を敢て『道徳感情論』の中に付していた関連の意味が見えなくなってしまう。邦訳では米林訳も水田訳でも『道徳感情論』の付録として収められている。
- (50) Lindgren, pp.12-13. *L.R.B.L.* (C.F.L.) pp.203-205. 『道徳感情論』、水田洋訳、岩波文庫 (下)、403-408ページ。
- (51) *Ibid*, p14-15. *L.R.B.L.* (C.F.L.) pp.205-214. 『道徳感情論』、水田洋訳、岩波文庫 (下)、409-424ページ。